

スポーツを通じた地域振興に関する研究

—スポーツランドみやざきの試みと県民のスポーツ参加、
特にAOTAIを中心に—

戸島 信一

Research for Promotion in Sport

- Sportland MIYAZAKI Challenge and the Participation of
Prefectural People in sport events, especially in AOTAI -

Shinichi TOSHIMA

近年宮崎県は「スポーツランドみやざき」の構想のもと、プロスポーツの春季キャンプ地として、多くのチームを誘致してきた。またそれを見物に多くの観客が訪れるようになった。しかし、キャンプの誘致はスポーツランドみやざきという健康立県政策の一環であり、県民がスポーツを通じて心身の健康増進をはかるところまで進化する必要がある。多くの市民参加によって参加者が増加してきたマラソンは、まさに「するスポーツ」の典型である。特に最近の女性のフルマラソン参加者の増加は注目される。女性ランナーの行動・意識調査の結果分析を通じて、真の「スポーツランドみやざき」形成の可能性を明らかにする。

1. 問題意識と課題

「スポーツランドみやざき」の構想は、キャンプの誘致活動で目覚ましい成果をあげてきた。しかしこの構想はそれが最終目標ではない。宮崎県におけるスポーツ文化の形成とそれを通じた健康立県に目標がある。キャンプ誘致活動に終始しては、単なる見る観光の1つとしての観光産業にすぎない。「スポーツランドみやざき」構想は県外のスポーツ選手や見物客の誘致運動ではない。本稿では、「スポーツランドみやざき」の究極の目標である県民自らスポーツ文化に勤しみ、健康づくりに取り組む環境の形成に向けての現状と課題を考察する。

2. キャンプ地宮崎の展開過程

宮崎県は1950年代から巨人軍のキャンプ地であり、50年あまりプロ野球のキャンプ地としての歴史を有する。温暖な気候、特に冬場に快晴の日が多いという気象条件を活かし、観光業界、ホテルや旅館業者によって熱心にキャンプ誘致が進められてきたし、そのための施設の整備が推進されてきた。1996年にそれまでホテル・旅館だけの誘致活動から、県と観光協会が参画したスポーツランドみやざき推進協議会が設置されるに至り、広報活動の展開や窓口の一本化が図られた。県内の各競技施設の予約状況・空き状況を県観光推進課と(財)みやざき観光コンベンション協会が一括して把握し、キャンプの問い合わせ・要望に迅速に対応しており、現地

案内、打ち合わせに至るまでスムーズに対応できるシステムが構築されている。施設の利用実績が一括して把握できることによってそれが広報活動に反映され、さらに効率よい効果的な誘致活動に繋がられている。そのことによって1994年にはスポーツキャンプへは、326団体47,145人の延べ参加人数であったが、96年には478団体78,565人の延べ参加人数と増加した。さらに2000年には698団体90,671人、2004年には878団体115,399人、そして2007年には1,041団体162,148人にまで増加してきた。

県内の30市町村の内スポーツキャンプに関わった市町村は22に及んでいる。マスコミでは、プロ野球やJリーグのプロのサッカーチームのキャンプがよく話題にされるが、2007年度の場合、社会人164団体、学生825団体であり、プロのチームは52団体であった。確かに観客はプロのチームに集まるが、キャンプの主流はむしろアマチュアのアスリート達である。

2008年度はプロ野球のキャンプが行われたのは巨人（セリーグ優勝）、広島、西武（パリーグ優勝、日本シリーズ優勝）、ソフトバンクの4チームとヤクルトのファームであったが、WBCのキャンプが行われ、例年にない賑わいをみせた。韓国のプロ野球チームも2チームキャンプを行った。この他野球では県内の22施設で、高校4チーム、大学36チーム、社会人13チームがキャンプを行った。またサッカーはJリーグのチャンピオンチームや有力チームである鹿島アントラーズや、ガンパ大阪、浦和レッズをはじめJ1が9チーム、J2が9チームで合わせて過去最高の18のプロチームが宮崎でキャンプを行った。サッカーのキャンプとして使われたのは県内12の施設であった。

2007年度の観客動員数は61万1千人、経済効果83億5百万円であったが、2008年度はこれを大きく上回ることは間違いない。

3. 宮崎県のスポーツランド戦略

2005年に策定された宮崎県総合長期計画「元気みやざき創造計画」の中で、「健康立県」と「環境立県」が2本柱にされており、「元気みやざき」の構成要素として「スポーツランドみやざき」プロジェクトは6つの分野横断プロジェクトの1つに位置づけられている。具体的な施策として掲げられているのは以下の3つの分野である。

- (1) スポーツを通じた経済の活性化の推進
スポーツキャンプ・合宿の拡大、スポーツイベントの開催、スポーツ体験プログラムの提供、スポーツランドみやざきの発信
- (2) スポーツを通じた元気な人づくり戦略
スポーツを通じた自主的な健康づくりの推進、障害者や高齢者のスポーツの振興
スポーツランドにふさわしいレベルの向上、アスリート育成基地の形成
- (3) スポーツを核とした地域づくり戦略
スポーツを通じたコミュニティづくり、地域における青少年の育成、各地域のシンボル
スポーツを核とした地域づくりの推進。

このように、(2)に掲げられているような、スポーツを通じての県民の健康づくりや人づくりの課題、そして(3)の地域づくりの一環にも掲げられ、スポーツを通じた総合的な地域振興施策である。

4. A O T A I の経緯と参加者数の動向

このように、スポーツランドみやぎの構想は、キャンプの誘致活動で目覚ましい成果をあげてきた。しかしこの構想はそれに終わらず、宮崎県におけるスポーツ文化の形成とその展開に目標がある。キャンプ誘致活動に終始しては、単なる見る観光の1つとしての観光産業にすぎない。本稿では県民自らスポーツ文化に勤しむスポーツランドみやぎの形成に向けての現状と課題を考えるために、トップアスリートのスポーツの世界だけではなく、一般県民も気軽に参加できるスポーツの場として国際青島太平洋マラソンを対象にして分析することにする。

現在では国際青島太平洋マラソンというのが正式名称であるが、親しみを込めて宮崎の人々にはA O T A Iと呼ばれている。同大会は、1987年11月に開催された第1回宮崎太平洋マラソンと1988年4月に開催された第1回青島・海さち山さちマラソン大会が統合されて、1988年12月に第2回青島太平洋マラソン大会として開催された。当初は20kmが最長であり、青島をスタート・ゴールにしていたが、1990年第4回大会からフルマラソンが開始され、総合運動公園をスタート・ゴールにするようになった。また第6回大会から視覚障害者の部門も設けられている。

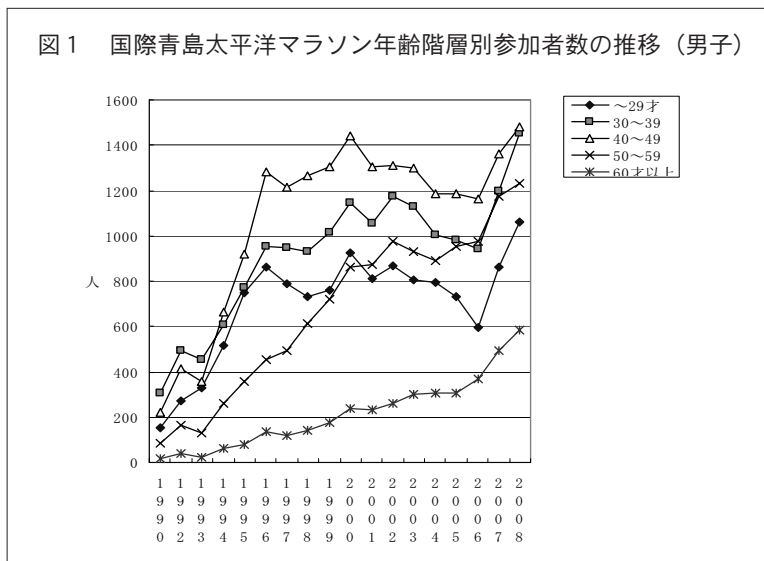
その参加者の動向をまず男子について表1および図1に示した。

もともと、青島地区のホテル・旅館街が宿泊客を確保する戦略の一環として大会が取り組まれたこともあって、開催当初はあまり多くの参加者は得ていないが、おりからのジョギングブームの影響を受けて、1990年代前半は急速な参加者の増加を見た。しかし、1996年を1つのピークにしてその後は停滞気味に推移する。フルマラソンの大会が全国各地で開催されるようになったことや、同日に3万人規模で日本人の参加者が多いホノルルマラソンが開催されていることの影響も考えられる。また年齢別に見れば20才代、30才代、40才代が伸び悩む中で、50才代、60才代が順調に増加するという特徴があった。その後、2006年を底に再び増化傾向に転じる。減少・停滞傾向にあった、最も参加の多い40才代が増加傾向に転じ、30才代、20才代も増加傾向になり、ほぼ一貫して増加してきた50才代、60才代も増加のテンポが上がっている。

表1 国際青島太平洋マラソン男子の年齢階層別エントリー者数の推移
 (単位：人、倍)

	～29才	30～39	40～49	50～59	60才以上	合計
1990	151	307	221	87	18	784
1992	271	494	416	165	40	1,386
1993	330	456	357	133	22	1,298
1994	518	609	662	259	61	2,109
1995	748	773	920	359	78	2,878
1996	863	956	1,284	454	137	3,694
1997	790	945	1,216	493	119	3,563
1998	731	933	1,265	610	140	3,679
1999	759	1,018	1,304	721	176	3,978
2000	923	1,147	1,441	860	236	4,607
2001	814	1,056	1,304	876	235	4,286
2002	869	1,172	1,312	974	260	4,587
2003	807	1,128	1,301	933	300	4,469
2004	797	1,004	1,185	893	308	4,187
2005	731	983	1,183	951	308	4,156
2006	596	940	1,162	974	370	4,042
2007	863	1,196	1,360	1,172	496	5,087
2008	1,063	1,452	1,483	1,233	583	5,814
2008/1990	7.04	4.73	6.71	14.17	32.39	7.42
2008/2000	1.15	1.27	1.03	1.43	2.47	1.26

図1 国際青島太平洋マラソン年齢階層別参加者数の推移（男子）

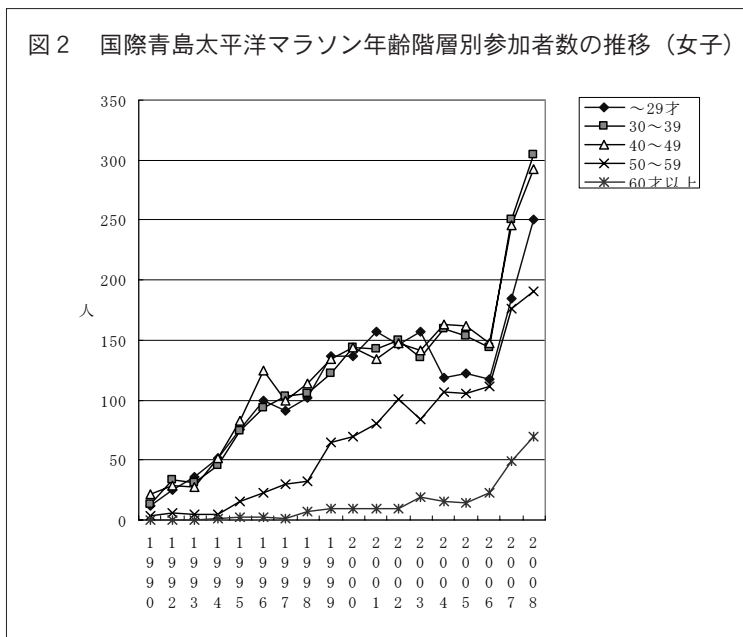


一方女子の動向を、表2および図2に示した。開催当初の女性の参加者はわずか51人であり、男性の1/16という数である。3桁に達するのが1994年であり、1999年まで順調に増加を続けたが2000年代前半停滞傾向を示した。その後この2年で2倍の増加という急激な動きを見せた。女性の参加者は4桁になり、男性の1/5近くになった。男性に比べ、女性のフルマラソンの歴史は浅い。女性のフルマラソン参加が公式に認められたのは、1972年のボストンマラソンであり、女性だけの大会は東京国際女子マラソンが嚆矢であり1979年に始まり、女子マラソンが本格化した。オリンピック種目になったのも、1983年のロスアンジェルスオリンピックからである。

表2 国際青島太平洋マラソン女子の年齢階層別エントリー者数の推移
(単位：人、倍)

	~29才	30~39	40~49	50~59	60才以上	合計
1990	12	13	22	4	0	51
1992	25	34	29	6	0	94
1993	36	31	27	5	0	99
1994	52	46	52	5	1	156
1995	76	74	83	15	2	250
1996	99	93	125	23	2	342
1997	91	103	99	30	1	324
1998	102	105	114	32	7	360
1999	137	122	134	65	10	468
2000	137	144	144	70	10	365
2001	157	143	134	80	9	523
2002	146	150	147	101	9	553
2003	157	135	141	84	19	536
2004	119	159	163	107	16	564
2005	122	153	162	105	14	556
2006	118	144	148	111	23	544
2007	184	250	246	176	49	905
2008	250	305	293	190	69	1,107
2008/1990	20.83	23.46	13.32	47.50		21.71
2008/2000	1.82	2.12	2.03	2.71	6.90	3.03

図2 国際青島太平洋マラソン年齢階層別参加者数の推移（女子）



また女性のマラソンは長い間トップクラスのアスリートだけの世界であった。男性のように市民ランナーに普及してきたのはごく最近のことだと考えて良い。

また、年齢別に参加者の動向を見ると、男子の場合は40代がほぼ一貫して首位であり、次いで30才代、50才代、20才代となるが2001年以降50才代が20才代を恒常的凌ぐようになってきた。男性の増加は熟年ランナー達の増加に依存している。一方女子では20才代、30才代、40才代がほぼ同数で推移してきている。女子の場合は2000年以降に実に3倍に増加しており、この間の男性の1.26倍の伸びを大きく上回る急速な伸びを示した。このようにフルマラソンは男性の若者や中年層を主体としたスポーツから、熟年層にも参加者が拡大し、さらに女性も参加するスポーツへと、今や老若男女の幅広い性別・年齢層が取り組むスポーツへと進化してきた。

以上のように、A O T A Iの参加者の動向にも現れているように、最近の参加者の増加から第2次のジョギングブームが到来していると見て良い。これはメタボ対策をはじめ、生活習慣病対策、禁煙運動、健康ブームが背景にあるものと思われる。ちなみに、2007年から始まった東京マラソンは、初年はフルマラソン2万5千に人に対し応募者はその約3倍、2008年は約5倍、2009年には定員を3万人に増やしたが、応募者は約7倍の22万人に達した。走りたい人の7人に1人しか出走できないという厳しい競争になっている。ランナーズ誌によれば、国内の大会でのフルマラソン完走者（男女計）は2004年度（4月から翌年3月まで）の78,776人から2007年度の114,520人へこの5年間で35,744人、45.4%の増加をみている。これには先ほどの新しく始まったビッグな東京マラソンの影響が大きいが、完走者の内女性は19,442人でその割合は17.0%になった。第2次ジョギングブームは、このように高齢層、女性といった今までスポーツの世界には疎く、むしろ社会的には弱者といわれた人々に走るスポーツ文化が浸透してきたことが特徴である。

5. フルマラソンにチャレンジする女性達

このような目覚ましい女性ランナーの増加は、スポーツ文化の一般市民への浸透を象徴すると思われる。このフルマラソンを1つのモデルとして取り上げ「スポーツランドみやざき」の現状、課題をより詳しく分析してみたい。増加著しい女性ランナーの意識と行動を解明することによって、その実態が明らかになると考える。以下は、2007年12月9日の第21回国際青島太平洋マラソンに参加し、フルマラソンを完走した女性ランナーに対するアンケート調査の分析である。調査はフルマラソンを完走したランナーに、ゴール直後に学生達がインタビュー調査を行った。調査数は100人であり、完走者の1割強である。サンプルが100のため、数がそのまま割合(%)を示すことになる。

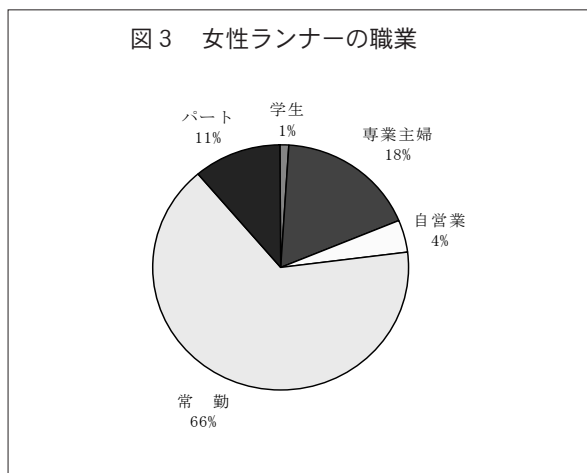
(1) 参加者の居住地

調査対象者の居住地は、福岡県が最も多く28人、次いで開催県の宮崎県12人、東京都11人、神奈川県9人、熊本県6人、佐賀県4人であり、以下千葉県他5県が3人、新潟県他3県が2人ということであった。地域別では宮崎県を除く九州が45人、関東圏が26人、関西圏が8人、その他9人という状況である。開催県の参加割合が低いのが、これは後で参加者全体を対象に分析する。

(2) 記録の分布

調査対象者について整理すると、3時間30分未満が11人、3時間30分～4時間が31人、4時間～4時間30分未満が30人、4時間30分～5時間未満が21人、5時間以上が7人である。同大会では制限時間が6時間であった。100人に達した時点で調査を終了したため、レベルの高いランナーが多くなっている。フルマラソンの完走回数は、初完走者が18人、2回目が19人、3回目は14人と3回以内が51%と最近始めた人の割合が高い。以下4回目が7人、5回目9人、6回目11人、7回目と8回目が3人、9回目が1人、10回以上が13人であった。このようにマラソンはリピーターが多いのが特徴であり、大会が継続されてきた背景にはこのことがある。

(3) 職業など



マラソンランナーは、日頃どのような生活を送っているのかを明らかにするために、職業等の状態をまず質問した。66人が常勤の勤めであり、専業主婦が18人、パートの勤めが11人、自営業が4人、学生が1人という構成であり、有業者が81%を占めた。

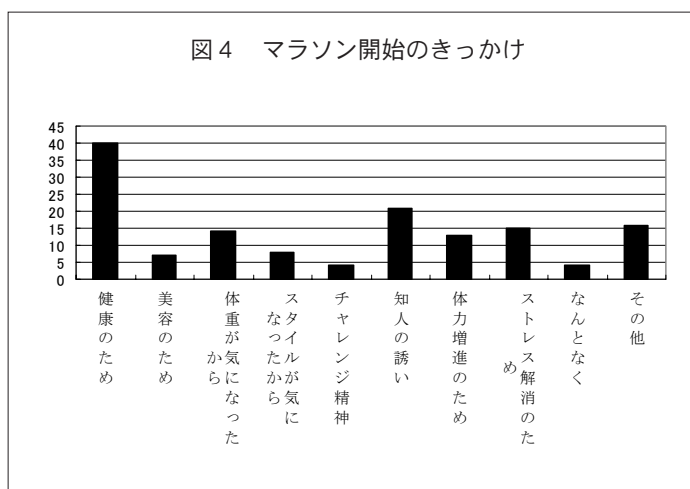
女性ランナーの大部分は有業者であり、かつ常勤の仕事を持っている人が主流であるということになる。時間的余裕があり、暇だから走っているわけではないということになる。具体的な職業は、公務員や会社の事務職が多く普段頭を使う仕事をしている人が体の健康を求めて走っている傾向が強い。また看護師や保育士、教師、さらに営業職の人も結構多く、かなり体力を使う人も体力維持のために走っている。ともかくマラソンを走る女性は、仕事と遊び（スポーツ）の両立志向の人達が主流である。

(4) 家族構成

マラソンを走る女性はどうのような家族環境にあるのかを尋ねた。まず、既婚か未婚か、子どもの有無で聞いたら、既婚で子どもありが最も多く47人、ついで未婚が40人、既婚で子どもなしが13人であった。女性ランナーは、未婚者に比べ、既婚者の割合が高く、全体の60%を占めていることがわかる。また、既婚者の中でもその8割近くが、子どもがいると答えており、子どもを持つランナーが多いことが分かる。かつてランナーの多くは結婚すれば引退するということが当たり前であったが、トップアスリートの中にも、結婚して子どもができて競技を継続する人が出てきた。既に市民ランナーの世界では主流はそういう人たちになっていることになる。仕事と家庭（家事、育児）の両立ではなく、それに遊び・レクリエーションとしてのマラソンに取り組む3立（鼎立）志向、ワークライフバランス志向のバイタリティ溢れるマラソンウーマン像が浮かびあがってくる。

(5) 走り出した契機（複数回答可）

女性ランナーは一体なぜマラソンを始めたのであろうか。その契機について質問してみた。図4に示すとおり、最も回答が多かったのは「健康のため」40人である。回答したランナーのほとんどが自分の仕事を持ち、毎日忙しい生活を送っているようである。その回答者の半数以



上が事務職であり、体を動かす機会に恵まれていないと思われる。そのような運動する時間が少ない中で、健康のためにマラソンを実践している人が多いことがわかる。また公務員や教員、介護を行う福祉関係の仕事に携わる人も多かった。忙しい人ほど、相手がいらす、いつでも一人で体を動かすことのできるスポーツ、マラソンをはじめよう。また中には病気をしたことがきっかけで健康を意識するようになったという人もいた。

次に多かったのは「知人の誘い」31人である。他のスポーツと違いマラソンはそう気軽にはやれないきついスポーツだというイメージが強い。しかし、身近にマラソンを続けている友人がいると、案外自分にもやれるのではということから始めたということであろう。自分のパートナーがマラソンをしていたことから、一緒に走るようになったという人も少なくないようである。

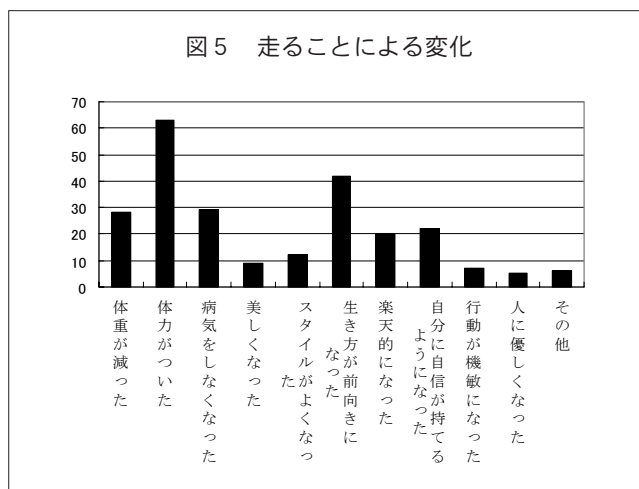
それから「ストレス解消のため」15人「体重が気になったから」14人という理由が続く。年令を重ねて体重が気になったり、仕事でストレスを感じるようになった人達が、体を動かすことで健康的に自己管理をしようとして、始めた人も多いことがわかる。無理なダイエットや食事制限などの方法ではなく健康的な方法で、シェイプアップしたり、ストレス解消に取り組んでいる姿が伺える。

このようにしっかりとした目的意識を持ち、自主的にマラソンを始めていることが分かる。また、「その他」の回答としては、ホノルルマラソンにあこがれてとか、東京マラソンに出るため、Qちゃん（高橋尚子）にあこがれてとか、人と交流ができて楽しいから、など目標を持ったり、あこがれたりしてマラソンを始めた人も結構多い。健康づくりのために苦労するというより、楽しむ姿勢が見うけられる。

また走り始めた年齢を聞いてみると、子どもや学生時代からという人はむしろ少数派であり、結婚してからとか子どもが大きくなってからという人が主流である。40才、50才を超えてから走り始めた人も結構多い。まさに健康志向としてのスポーツである。

(6) 走ることの効果

次に、マラソンを始めて、肉体的および精神的にどのような変化があったかを聞いてみた。



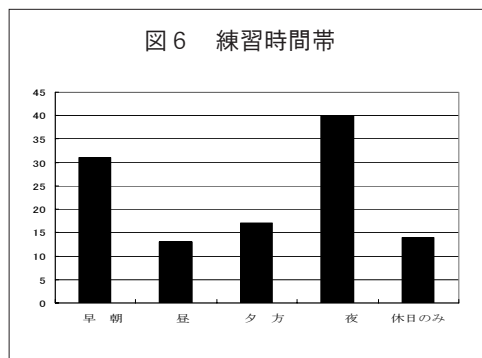
最も多かったのは、「体力がついた」である。やはり長い距離を走り続ける有酸素運動（エアロビクス）を日常的に行うことによって、疲労回復能力が高まり、持久力も強化されるため体力に自信がつくようである。回答者の63人がこの選択肢を選んでいる。また同じく肉体的な変化として「病気をしなくなった」29人と「体重が減った」25人が挙げられている。

さらに精神的な面では、「生き方が前向きになった」が42人と全体で2番目と高い支持を得た。また「自分に自信が持てるようになった」22人「楽天的になった」20人という項目も結構多くの方が挙げている。体力がつくということは、精神的にも変化をもたらすことが明らかである。それは生き方にも変化をもたらすことになる。

肉体的には「スタイルが良くなった」12人や「美しくなった」9人という変化は気分的にもいいし、また生きる希望や生き甲斐を生み出す。「行動が機敏になった」7人や「人に優しくなった」5人は他人との関係に変化を生み出し、自分の生きる世界を良い方向に変えていくことにもなる。このようにマラソンという競技が、肉体的な面ばかりではなく、精神的な面にも大きな影響を与えているということがよく分かる。生得的な外見上の美しさではなく、目標を持って精進するというで形成される内なる精神から生まれる美しさもあるのではないかと感じた。実際に、アンケートに協力した女性ランナー達は、快く質問に応じる人が多く、みんな明るく爽やかな印象を受けた。身体の健康と心の健康が走ることによってバランス良く維持されているのではないかと感じた。

(7) 練習時間帯

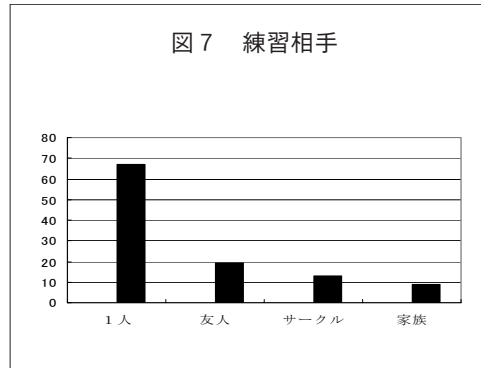
女性ランナーはいつ練習しているのでしょうか。専業主婦であれば昼間にできるが、仕事と家庭（子ども）のあるランナーにとっては、いわば極限的な時間の中で練習することになる。



当然早朝か夜かということになるが、夜の方が多かった。走り込みの距離が必要であることもあって、両方に回答する場合もあった。このように夜走る時間を見つけて走る女性ランナーが多いことは驚きであった。夜走れるような陸上競技場や公園等の安全で明るい場所の存在が、マラソンランナーにとっては不可欠ということになる。

(8) 走る相手

次にどういう形で練習しているかということを知った。女性は集団で行動することが多く、練習もけっこうきついので仲間で走っている場合が多いのでは思ったからである。

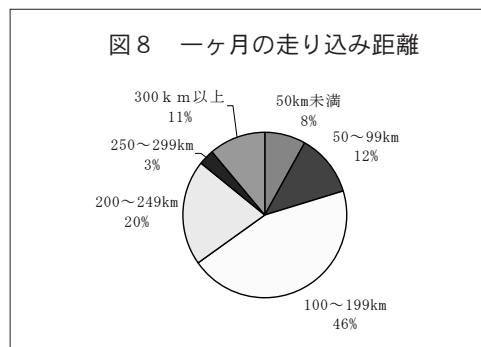


結果は1人が圧倒的であった。確かに友人やサークルの仲間達と走る人も少なくはないが、時間や場所の関係もあり、練習は1人という場合が主流ということである。もちろんジョギングスポットでは、たくさんの人が一緒に走っているという状況も存在しよう。家族で走れる幸福な人は一部である。靴とTシャツさえあればいつでもどこでも練習できる(走れる)ことがジョギングの特徴であるが、多くの人には1人で孤独のジョガーとして練習し、時には賑やかに大勢で走るために大会に出場するのであろう。

(9) 練習量について

マラソンは有酸素運動であり、体の中の血行を良くすることによって長時間走り続ける体力を着けなければならない。相当程度の練習量がなければ走りきることはできない。

図8のように、100km以下の人は全体の20%で、100km～199kmが44人、200km～299kmが23人、300km以上の人が11人という構成であった。このようにフルマラソンを志す女性達はさすがにしっかり走り込んでレースに望んでいることになる。



(10) サークルへの所属や他のスポーツ趣味活動、その他

1人で練習することの多いマラソンであるが、約5割の人が走ることを主にしているサークルに属している。仲間と一緒にレースに参加したり、練習をしてお互い刺激しあっているということのようだ。

マラソン以外の趣味があるかについても聞いてみたが、73人が「ある」と回答し、やはり、ランナーは趣味の豊富な人が多く、積極的にマラソン以外のスポーツなどの趣味を楽しみ、多くの人々と交流しているようだ。人々と関わり、交流していくことが自分の人生を豊かにし、人間としても成長できるのではないかと思う。

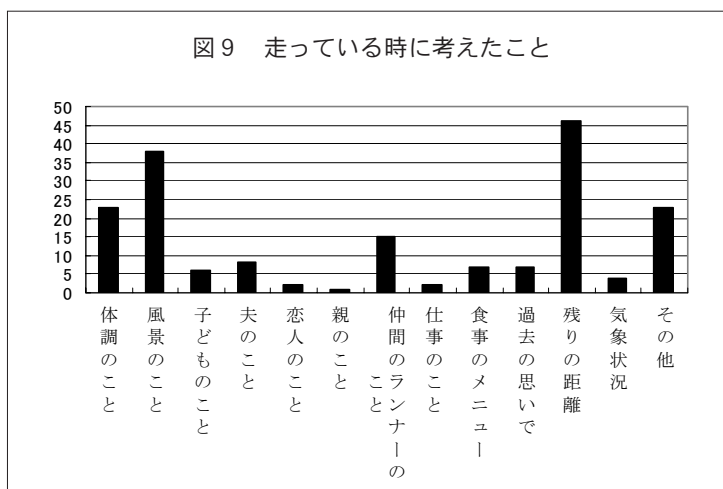
マラソン以外の趣味の例としては、エアロビクスや水泳といった同類の有酸素運動系が多かったが、テニス、弓道、登山、ダンス、ゴルフ、トライアスロン、ダイビング、サーフィン、バスケット、スノーボード、卓球、バレーボール、ヨガ、馬術というスポーツ分野だけでなく、書道、絵画、花道、茶道、料理、音楽（琴、フルート）、ソーイング・手芸、英会話、読書、旅行など文化的な趣味もあり、自己実現の世界を多様を持っていることがわかった。人生を楽しく生きるという姿、色々なことにチャレンジしようとするアクティブライフの世界がある。

最後に完走したランナー達は途中何を考えながら走ったのであろうか。長い時間かけて走るには、ずっと苦しさが続く状態では走りきれない。かなり余裕を持って走らないと最後まで完走できない。最も多かったのは「残りの距離」で、次いで「風景のこと、3番目が「体調のこと」、以下「仲間のランナーのこと」（同じレースを走っている）、「夫のこと」「過去の思い出」「食事のメニュー」「子どものこと」などが続いた。

仕事のことは意外に少ない。基本的には家族のことや仕事のことを忘れ、1人の人間になって走るということであろうか。その他の答えには「孫のこと」という我々が予想しなかった回答もあった。フルを走る元気なお祖母ちゃんは頼もしい限りである。そのほか記録のことや、感謝の気持ち、ひたすらゴールすることを考えたり、ゴール後の打ち上げのことを考えるなど、走りながら色々な思いが頭の中で走馬燈のように去来しているようである。走ることは意外にも考えることでもあるみたいだ。自然の中を走りながら、自然である自己と向き合う世界なのかもしれない。

このように女性ランナー達は新しい文化を創り出していると考えて良い。以前は、マラソンと言うと男性が走るものだと思われていた。女性の参加者は少なかった。しかし、先に見たように、女性参加者は年々増加し、その増勢は男子を上回っている。彼女たちはマラソンというスポーツを楽しむ中で、男性とは異なった女性のスポーツ文化を創り出してきた。私たちは走

図9 走っている時に考えたこと



りきってゴールしたランナーを見て美しく輝いていると感じた。化粧をしたり、飾ったりしていなくても、生き生きと生きている、とても美しいと感じた。作られた「美」や「健康」ではなく、自然な「美」と「健康」のすばらしさを教えられたように思う。子どもや、家族に従属するのではなく、1人の自立した人間としてどう生きるかの追求が、マラソン参加に現れている。このような人生観の変化、新しい生き方の探求がマラソン参加者の増加となって現れていると考えてよい。

6. A O T A I への宮崎県民の参加状況

A O T A I は、ここ数年全国の全都道府県からの参加者を得ており、人気の高い大会である。最近再び参加者が増加傾向を示すようになり、宮崎県のイベントとしても大いに期待がもたれ、地元紙も熱心に取り上げるようになった。また応援が増えるようにとコースも市街地の真ん中を通るように変更された。だが、先述のように冬場オフシーズンの宿泊客獲得の戦略として始められたこともあって、今まで航空会社とも連携して関東、関西を中心とする県外からの参加者の確保に力が注がれてきた。「スポーツランドみやざき」の進化すべき戦略からすれば、宮崎県民の参加動向が気になるところである。そこで、表3を作成した。

表3 国際青島太平洋マラソンの県内・県外別、年齢別エントリー者の推移
(単位：人、%)

			1998	2003	2007	2008
男 子	～29才	全体	731	807	863	1,063
		宮崎県	368	340	392	530
		構成比	50.3	42.1	45.4	49.9
	30～39	全体	933	1,128	1,196	1,452
		宮崎県	271	286	309	486
		構成比	29.0	25.4	25.8	33.5
	40～49	全体	1,265	1,301	1,360	1,483
		宮崎県	353	318	315	425
		構成比	27.9	24.4	23.2	28.7
	50～59	全体	610	933	1,172	1,233
		宮崎県	161	200	245	330
		構成比	26.4	21.4	20.9	26.8
	60才以上	全体	140	300	496	583
		宮崎県	32	55	82	134
		構成比	22.9	18.3	16.5	23.0
合計	全体	3,679	4,469	5,087	5,814	
	宮崎県	1,185	1,199	1,343	1,905	
	構成比	32.2	26.8	26.4	32.8	
女 子	～29才	全体	102	157	184	250
		宮崎県	41	54	57	81
		構成比	40.2	34.4	31.0	32.4
	30～39	全体	105	135	250	305
		宮崎県	25	19	43	67
		構成比	23.8	14.1	17.2	22.0
	40～49	全体	114	141	246	293
		宮崎県	34	36	45	56
		構成比	29.8	25.5	18.3	19.1
	50～59	全体	32	84	176	190
		宮崎県	8	25	27	44
		構成比	25.0	27.8	15.3	23.2
	60才以上	全体	7	19	49	69
		宮崎県	1	3	5	10
		構成比	14.3	15.8	10.2	14.5
合計	全体	360	536	905	1,107	
	宮崎県	109	137	177	258	
	構成比	30.3	25.6	19.6	23.3	

(各年の大会パンフより集計)

筆者はこの間11年連続A O T A Iを完走しているが、その大会パンフから県民の参加動向を分析してみた。1998年では、29才以下の男子では県民の割合が50.3%と半数を占め、また同年年齢層の女子でも40.2%と高い比重を占めているが、その他の年齢層ではほとんど2割台に留まり、男子では全体でも32.2%、女子では30.3%である。そして2003年、2007年と県民の割合はむしろ低下していく。これは県内の参加者も少しは増加してはいるが、県外からの参加者がそれを上回る増加を見せたからである。その状況を分析したのが表4である。

表4 国際青島太平洋マラソンのエントリー者の男女別、年齢別、県内・県外別増減

(単位：人、増減率%)

		1998～2003	2003～2007	2007～2008	1998～2008	
男子	全体	～29才	76 (10.4)	56 (6.9)	200 (23.2)	332 (45.4)
		30～39	195 (20.9)	68 (6.0)	256 (21.4)	519 (55.6)
		40～49	36 (2.9)	59 (4.5)	123 (9.0)	218 (17.2)
		50～59	323 (52.9)	239 (25.6)	61 (5.2)	623(102.1)
		60才以上	160(114.3)	196 (65.3)	87 (17.5)	443(316.4)
		合計	790 (21.5)	618 (13.8)	727 (14.3)	2,135 (58.0)
	宮崎	～29才	28 (7.6)	52 (15.3)	138 (35.2)	162 (44.0)
		30～39	15 (5.5)	23 (8.0)	177 (57.3)	215 (79.3)
		40～49	35 (9.9)	3 (0.9)	110 (34.9)	72 (20.4)
		50～59	39 (27.8)	45 (22.5)	85 (34.7)	169(105.9)
		60才以上	23 (71.9)	27 (49.1)	52 (63.4)	102(318.8)
		合計	14 (1.2)	144 (12.0)	562 (41.8)	720 (60.8)
	増加内訳	県内	14 (1.8)	144 (23.3)	562 (77.3)	720 (33.7)
県外		776 (98.2)	474 (76.7)	165 (22.7)	1,415 (66.3)	
女子	全体	～29才	55 (53.9)	27 (17.2)	66 (35.9)	148(145.1)
		30～39	30 (33.8)	115 (85.2)	55 (22.0)	200(190.5)
		40～49	27 (23.7)	105 (74.5)	47 (19.1)	179(157.0)
		50～59	52(162.5)	92(109.5)	14 (8.0)	158(493.8)
		60才以上	12(171.4)	30(157.9)	20 (40.8)	62(885.7)
		合計	176 (48.9)	369 (68.8)	202 (22.3)	747(207.5)
	宮崎	～29才	13 (31.7)	3 (5.6)	24 (42.1)	40 (97.6)
		30～39	6 (24.0)	24(126.3)	24 (55.8)	42(168.0)
		40～49	2 (5.9)	9 (25.0)	11 (24.4)	22 (64.7)
		50～59	17(212.5)	2 (8.0)	17 (63.0)	36(450.0)
		60才以上	2(200.0)	2 (66.7)	5(100.0)	9(900.0)
		合計	28 (25.7)	40 (29.2)	81 (45.8)	149(136.7)
	増加内訳	県内	28 (15.9)	40 (10.8)	81 (40.1)	149 (19.9)
県外		148 (84.1)	329 (89.2)	121 (59.9)	598 (80.1)	

(大会パンフより分析。なお、増加内訳のカッコ内は、増加に占める県内と県外の割合を示す)

1998年から2003年にかけては、男子で増加数の98.2%は県外によって占められ、女子でも84.1%を県外の増加が占めた。また2003年から2007年にかけても、増加の内男子で76.7%、女子で89.2%が県外者の増加による貢献である。さらに、年齢別に見ると県内の20才代、30才代、40才代の増加は極めて弱く、減少している場合もあり、着実に増加しているのは50才代、60才以上である。このように1998年から2007年の参加者数が伸び悩んでいた時期は、参加者数の県内の比重は低下傾向にあり、「スポーツランドみやぎ」のお膝元としては、寂しいものがあった。大会は圧倒的に県外の参加者に依存して実施されていたのである。

だがこの1年で状況が変化してきた。2008年の県内の参加者は、前年に比べ男女とも全ての

年齢層にわたって顕著な増加傾向を示した。増加率でみると女子60才以上の100%、同じく同世代男子の63.4%の増加という高年層（熟年層）の著しい増加をはじめ、男子全体で41.8%、女子で45.8%の増加を見た。フルマラソンの参加者はいきなり増やそうと思っても増えるものではない。相当の準備期間、練習が必要だからである。県内参加者の数でいうと男子の増加数562人、女子のそれは81人であり、1年間でこれだけの新しくフルマラソンにチャレンジする県民が出現したことになる。県内の参加者は長いこと千人台に留まっていたが、ようやく2千人台に乗った。この1年での増加数に占める県内の増加割合は、男子で77.3%、女子で40.1%を占める。このようにして県内参加者のシェアが低下傾向から増加傾向に転じたのである。

7. むすび — スポーツランドによる地域社会の活性化へ —

温暖で風光明媚な宮崎県は観光産業が重要な部門であることはこれからも変わらないであろう。だが、大型リゾート開発政策が大きな禍根を残したように、時代の流れを読み違えると痛手は大きい。キャンプ地みやざきは、「見る観光」から「する観光へ」の変化の中で生まれてきた。しかしアスリート達に取っては「する観光」、スポーツの練習の場ではあっても、そこに集まる見物客はあくまでも「見る観光」の1つである。

「スポーツランドみやざき」は、今まで主にアスリートのキャンプ誘致であった。フルマラソン大会への参加という「する観光」としてのAOTAも多くの県外からの宿泊参加者を得るための大会としての性格が強かった。

しかし、本稿で分析してきたように、近年ようやく県民自らがスポーツに勤しむ傾向が出てきた。成熟社会における食生活の豊かさの実現と、それによる生活習慣病の増加、その対策としての健康管理や身体管理の必要性が高まってきた。健康ブームはスポーツの大衆化を生みだし、その1つとしての手軽に、誰でもいつでもどこでもできるジョギングやウォーキングが広く取り入れられるようになった。しかし、日常的に運動を継続するには何か目標が必要である。ウォーキング大会やマラソン大会はその目標である。本稿でフルマラソンの参加者の動向を分析したのは以上のような位置づけからである。かつては、トップアスリートのごく一部の人のための世界のものであったフルマラソンが大衆化した。それは「よだきぼ」の多いといわれる宮崎県民をも巻き込み始めており、県民へ広くスポーツ文化が浸透しつつある。この動きを進めて行くことによって、真の「スポーツランドみやざき」が実現する可能性がでてきた。そして、アンケート分析で女性達の人生観、生き方の変化を明らかにしたが、それはパートナーや仲間、相手である男性の生き方に影響を与えるのは必至である。近年少子・高齢社会への移行の中でそのマイナス要因だけに目を奪われ、将来を悲観的に捉える傾向が強かった。しかし、本稿で分析したような、スポーツに勤しみ、人生を元気に生き抜こうとする中高年層、そして新しい人生観を持った女性達の増加には頼もしいものがあり、希望がある。その動きの中にスポーツを通じた地域の活性化、健康的で元気な地域社会形成という新たな地域活性化、持続的地域社会形成の方向性も描けるのではなからうか。

参考文献

- 1) 『宮崎県総合長期計画』2005年
- 2) 日本経済新聞2009年2月13日付
- 3) 宮崎大学教育文化学部社会学ゼミ社会調査演習 報告書『マラソンにチャレンジする美しき女性ランナーの意識と行動』2008年
- 4) ランナーズ編集部『フルマラソン1歳刻みランキング記録集』2007.4-2008.3 2008年
- 5) 国際青島太平洋マラソン大会パンフ各年
- 6) 亀山佳明編『スポーツの社会学』世界思想社 1996年
- 7) 八木田恭輔編『スポーツ社会学』嵯峨野書院 2002年
- 8) 高津勝『スポーツ社会学の可能性』創文企画 2008年

(2009年4月22日受理)